
[サガシモノ]

尖角?...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「サガシモノ」

【Nコード】

N3280T

【作者名】

尖角? . . .

【あらすじ】

主人公は記憶喪失になり、自分が誰なのか、そして自分は何者なのかということが分からなくなってしまう。

だから、主人公は自分の記憶を探すためにいろいろな努力をします。そんな状況を、懸命に歩いていく主人公の姿を描いた作品です。

記憶喪失（前書き）

この小説は記憶喪失がテーマなので、主人公が記憶を追いかけていく様を書くつもりです。
それではどうぞ！！！！！！！

記憶喪失

私はどこの誰だろう？

気が付いたのは夜だった。

もう窓の外が暗い…。そこから得た情報だった。

私は女の子の部屋らしき場所にいて、ベッドで寝かされていた。

起き上がることができたので、私は周りを見回した。

可愛いピンク系の置物でまとめられている。

ピンクの可愛い豚の貯金箱。ピンクの可愛いペンケース。

いかにも女の子の部屋そのものだった。

ところで、私は誰だろう？

私はどうやら記憶喪失というやつのようなのだ。

まったく自分のことを覚えていない。

過去の記憶のすべてが私の中には存在しなかった。

だが、私は男である。

これだけはわかった。

明らかに女の人とは違ったから…。

いくつかのことを考えていると、突然部屋の扉が開いた。

入ってきたのは高校生か大学生くらいの、どちらかという小柄な女の子だった。

彼女は私、、俺を見て、「あ！目を覚ましたんですか！！」と言った。

この女の子は、記憶があつたころの俺の彼女か兄妹の何かだろうか？

まだ、俺は自分の顔を見ていない。

なぜかという、この部屋には鏡がなかったから…。

だから、彼女が俺の年下なのか、はたまた年上なのか、想像することすらまったくできなかった。

そんな彼女に、取りあえず俺は「どうやら俺は記憶をなくしたらしい…」「あんた俺の知り合いか？」「俺はなんで記憶をなくす破目になったんだ？」の3つを声かけた。

すると、「記憶喪失なんですか？」っと聞いてくる彼女。

そして「弱ったなあ」つと後に続ける。

俺は何が言いたいのか見当がつかなかったので「どうしたんだ？
何が弱ったんだ？」つと聞いた。

彼女はそんな俺の言葉を聞いて、「私はあなたを家の前で見つけたから、部屋で面倒を見ているだけで、知り合いでもなんでもありません」つと言う。

俺は『そんな理不尽なことはないだろう』と思いながら、「じゃあ…俺はいつたい誰なんだ？」「まさかわからないと言わないよな？」つと聞いた。

しかし、返ってきた答えはもちろん「わからない」だった。

記憶喪失（後書き）

短くてすみません。

終わり方も中途半端ですみません。

けれど、中途半端な終わり方がしばし続くと思います。
ご了承ください。

スーツケース（前書き）

記憶喪失の続きですが、あんまり話は進んでいません。

今回のキーワードはスーツケースだけなので、それだけ知ってもらえれば結構です。

スーツケース

俺はいつたい…。

俺はそんなことを考えて寝ることになった。

彼女の名前は、さいじょうみのり西条実莉。

なんと彼女は、俺の世話を1週間もしてくれていた。

そんな彼女は現在、たかうらさわ高浦沢大学に通う4年生であったため、高校生か大学生だと思った自分を情けなく感じた。

彼女の卒業後の進路はすでに決まっていた。

彼女は内定を親戚の家からもらったので、もはや遊びたい放題の毎日を過ごしていた。

そんな生活をしていた夏休み、外に遊びに出かけようとした時に、彼女は俺を見つけそれ以来世話をしてくれている。

正直、体とかはどのように拭いてくれたのか？

そこはむちゃくちや気になった。

しかし、俺が目覚めたのは12時過ぎだったので、詳しい話はまた明日となってしまった。

俺が朝目覚めたのは、9時半だった。

その時すでに彼女は起きていて、朝食を作っていた。

だから、それからしばらくして「ご飯出来たよ！」っと声をかけられた。

白米に卵焼きに味噌汁…。

彼女は1人暮らしの生活をしているので、ご飯が朝からしっかりしていた。

そんな彼女の作った卵焼きを口に運ぶ。

正直、うまい。

今までの卵焼きの味などこればっちも思い出せないが、実莉の卵焼きはうまいと思った。

俺はそんなことを思いながら「うまいな！この卵焼き」って言った。

すると、実莉は少し照れながら「ありがとう」って言うてくれた。

少し会話がなくなってきたころ、

俺は気になっていた本題に入ることにした。

「あのさ、俺を拾ってくれたとき、俺は何も持っていなかったの？」

少しの間をあけて、彼女は立ち上がり机から離れた。

何をするつもりなのか……？

まったく想像がつかなかった。

だが、そんな俺の目の前に彼女はスーツケースを持って現れた。

スイーツケース（後書き）

卵焼きは人によって味付けやなんやらが変わりますよね…。
ちなみに私の作る卵焼きはなかなか美味ですよ。

中身（前書き）

今回はスーツケースの中身についてです。

中身

スニーカー。

これは何を物語るのか…。

俺の、、俺の過去がわかるのだろうか？？

俺は実莉にスニーカーを手渡され、中身を空けることにした。

しかし南京錠があって開けられない。

『どうしたものだろうか？』

俺は少し考えた。

だが答えが出る前に、実莉が口を開く。

「あなたのズボンのベルト通しに鍵がついていたんだけど…」
と、、。

「それだ！」 俺は思わず叫んだ。

それから俺はベルト通しから鍵を外し、南京錠を開けることにした。

「ガチャ…」

ほんの少しの音とともにスーツケースを開ける。

中に入っていたのは服と手帳と鍵と現金20万円…。

服はパンツ2枚、ジャケット1枚、Tシャツ2枚、ズボンが1着、
靴下・ハンカチ・ティッシュが1セットだった。

手帳は雨で濡れたためか、文字がかすれて見えるようなものじやなかった。

鍵と現金…。

この存在は謎だった。

見当がさっぱりつかない。

なぜ鍵が？

なぜ現金20万円が？

なぜこんなものを入れる必要があったのか…。

鍵はどうやら駅かなんかの鍵らしい…。

しかし問題は現金の方。

なぜ現金20万円なのか？

さっぱり見当がつかなかった。

中に入っていたのはそれだけ…。

ほかに俺に繋がる手がかりはなく、一番の手がかりは手帳だった。

確かに、中はうまく読み取ることができない。

しかし、うつすらと少しだけ、少しだけなら読み取ることができた。

俺はここから自分探しを始めることになる。

中身（後書き）

自分探し…。

これは多くの人探し求めようとしたでしょう。

しかし、その中で“私は記憶喪失だから”っという人はそんなにはいないでしょう。

そんな数少ない人の一人が主人公です。

そんな主人公をこれからあたたかく見守ってやってください。

手帳（前書き）

手帳の内容に初めて触れます。

手帳

まずは手帳。

これにはさすがにうんざりした…。

『何がって？』 文字が薄いからだよ！

俺はこんな突込みを一人でしながら中を解読していた。

どちらかというと、中は手帳に書くようなスケジュールなどではなく、日記に近いものであり、内容は以下のようなものだった。

「 6月3日 金曜日

今日は曇り。

とても暇だ。

この作業は時間が空きすぎる。

かといって自由時間は何もすることはない。

何かしたいな…。

6月6日 月曜日

今日は晴れ。

つと言っても特にすることが何もない。

だから、外を少しうろついてみた。

与えられた時間は20分。

こんな短い時間で何ができるだろうか？

俺は近くの“コンビニ”というところに行ってみた。

中にはいわゆる高校生というやつがたむろしていた。
正直、『邪魔』としか思わなかった。

6月9日 木曜日

今日は曇りのち雨。

空気がどんよりしていて疲れた。

毎日同じことの繰り返し…。

何かこの空間でもできることはないのか？

最近思うことが増えてきた気がする。

6月12日 日曜日

今日は雨。

せつかく外に出れるのに…。

だから、俺は仕方なくみんなのところに行き、トランプを
することにした。

けれど俺は賭けに負けて、2万円無くした。

せつかくコツコツと貯めてきたのに…。

6月15日 水曜日

今日は晴れ。

これまでの仕事がやっと終わった。

今日からはトレーニングだ。

トレーニングは結構好きなのでよかった。

そして、退屈が一番嫌いな俺にとっては、さらによかった。

6月18日 土曜日

今日は雨。土砂降りだった。

雨は嫌いだ。

外では罪を洗い流すとか言われているようだが、そんなことはないだろう。

もしそうなら、あいつらは罪を背負わずに生きていることになる。

そんなことはありえない。

絶対にあってはならないのだ。

6月21日 火曜日

今日も土砂降り。

こんな土砂降りの中、彼は死んだ。

正直、彼とは、Sとは関わり合いがそうはなかった。

グループが違うし、トランプとかも一緒にしなかったから…。

しかし知らない中ではない。

もし知らない中なら死んだってどうでもいい。

けれど知っている人間が死ぬのはさすがに辛い。

—

俺はここまで解読して、2時35分に遅めの昼食をとった。

実莉は俺が解読している間ずっと待っていてくれた。

たまに俺が解読できないときは手伝ってもらった。

本当に実莉は優しい子だと思う。

手帳（後書き）

これからはちよくちよく手帳が出てきます。
なんせ手帳はキーワードですから（笑）

意味不明（前書き）

この世に存在する数々の意味不明なもの…。
そんな1話です。。。

意味不明

手帳の内容は意味不明としか言えなかった。

何が言いたいのか？ 俺には、俺達にはさっぱりだった。

作業とはなんなのか。仕事とはなんなのか。

そして、Sとは誰なのか。なぜSは死んだのか…。

何の想像すらも出来ない。

だから、俺は手帳の続きを読むことにした。

「 6月24日 金曜日

今日は晴れ。

一部の人間からは、いまだに悲しみは抜けていない。

だが、そんな悲しんではかりもいられず、俺はトレーニングに没頭した。

強くなれば死ぬことはない。

俺はより強くなろうと決めた。

6月27日 月曜日

今日は曇りのち晴れ。

今までで俺は70点が最高だった。

だが今日、それを超えることができた。
なんと74点。

あまり変わらない気もするが、少し努力が報^{むく}われている気がする。

6月30日 木曜日

今日は雨のち雲り。

雨が少し大振りだった。

正直、雨は嫌いだ。

気分が悪くなる。

だから、今日のテストは58点だった。

7月3日 日曜日

今日は晴れ。

だから、前回とは違った。

今日はなんだか気分が良かった。

あえて言うのならば、“最高”だった。

そんな中で受けたテストは83点。

俺もやればできる。

少し自信がついてきた。

7月6日 水曜日

今日は曇り。

なんだか気分が乗らない。

年に1度、不規則にやってくる病気のせいだ。

俺は、この時が1年の中で一番嫌いだ。

7月9日 土曜日

今日は雨。

天気予報とやらはあてにならない。

何が晴れだ！むかつく…。

むかつくことはもう一つあった。

病気のせいで人が死んだ。

今日は3人。B、K、Zの3人だ。

7月12日 火曜日

今日は曇り。

少し天気は悪くなりそうな気もしたが、

俺は前々から思っていた計画を実行することにした。

┐

また意味の分からないことだらけ…。

俺達は少し困り果てていた。

いくらなんでも意味が不明だ。

俺達はそのことについて、夜飯を食べながら語りあった。

意味不明（後書き）

意味不明…。

そう思うのは当たり前なのでは？
作者の思ったことです。

迷惑（前書き）

迷惑をかけているのは、あなたと私とがかかわっている証…。
そんなことを言っておきましょう。
ではどうぞ！！

迷惑

寝る時である。

少し困ったことがあった。

今まで、俺はベッドで寝ていた。

しかし、そのベッドは実莉のもの。

俺を寝かせるにあたって、実莉は自分の寝るところを貸し、自分はソファで寝ていた。

しかし、そんな事情を知った今、実莉をソファで寝かせるわけにはいかない。

だが、「俺がソファで寝るから、お前はベッドで寝ろ」と言っても、「あなたは客人だからベッドで寝て」と譲^{ゆず}らない実莉。

俺は「そうだな」「客人だし借りとくよ」と返事は決してしなかった。

なぜなら、俺のプライドがプライド許さないのだ。

そのことを散々説明すると、実莉は「仕方ないなあ」「わかったよ」と言っ^て、ベッドで寝ることを了承してくれた。

朝のことである。

起きたのは9時前後…。

それからご飯を食べ、昨日実莉がおろしてくれた新品の歯ブラシで歯を磨いた。

その後である。

俺が歯を磨き終わると、実莉が俺を呼んだ。

そして「あのさ……。名前、、まだ思い出せないんだよね？」
と言う。

俺は静かに「ああ…」と答えた。

正直、記憶については聞かれたくない。

それは、何もわからずに世話になっていると思うと胸が痛むからだった。

そんな俺に実莉は言った。

「気を落とさせたならごめんね？」

「私はただ、名前がわからないからなんて呼べばいいのかなって
思っ…。」

「だから、その…」

実莉はここで言葉に詰まる。

『何か言いにくいことなのだろうか？』

俺はそんな実莉を気遣って「どうした？」と優しく聞いた。

すると「いやっ、名前を考えたいなって…」

「今までみたいに“あなた”だけだと何かと不便だと思うから…」
っと言う。

「！？」 『それだけ？』 っとなんか思った。

そして「それもそうだな…っというかもっと早く言ってくれれば
よかったのに……」 「前から思ってたんだろ？」 っとなんか聞いた。

実莉は本当に優しい子だ。

それは実莉のことを見ていればわかる。

記憶をなくした俺を気遣って、そして気遣っている。

そんな実莉に、俺は“ありがとう”としか言いようがなかった。

そして、俺はその言葉と共にある提案をした。

「あのさ、布団と一緒に服とかを買いに行きたいんだけど…ダメかな？」

実莉は「いいよ」っと即答してくれた。

それと共に「ありがとうなんて言わないで？私はただ当たり前のことをしてるだけだから…」っと言う。

“なんて優しいんだ…”

それからしばらく、俺はそんなことしか考えることができなかった。

迷惑（後書き）

なかなか終わらないみたいです。
終わりが見えない…。
作者はこれと闘っているから！！

箆笥（前書き）

好き嫌いが無いって困りますよね？
そんな1話です。ではどうぞ！！

箆笥

不思議な気分だ。

まだ出会って間もない女の子とベッドを買いに行く。

こんなことが普通あるだろうか？

普通の人ならこんな経験をしたことがないだろう。

俺はそんなことを考えながらベッドを選んだ。

別に大きくなくても構わないし、好みとか記憶もない故どんなものでも構わない。

ただし、折り畳みじゃないと幅をとる。

それだけを気にしていたが、、

問題は服の方だった。

“ 好みがない ”

これは大いなる問題だった。

人はみな、持っている服を着るか、好みの服を買って着るだろう。

しかし、服を持っていなくて、好みのない人間はどうすればいい？

だから俺は、実莉に合う服を選んでもらった。

「私の好みで選んだから、少しファッションが偏^{かたよ}ってるかも……」

っと言う実莉。

はつきり言って、そんなことはどうだって良い。

だって俺には好みがないんだから……。

俺はそんな感じで自分の着る服を手に入れた。

余った金は17万2387円。

俺は「いつも世話になってるから」っとその余ったお金のすべてを実莉に手渡した。

しかし「いらないよ」っ何度断わる実莉。

「一体、それでは俺の気持ちはどうなる？」

俺はそう言って実莉にもう一度手渡した。

「わかった」 実莉は一言そう言って受けとった。

家に帰ってからの話である。

部屋が少し狭かったので、部屋の掃除と共に、ベッドの配置と箆^{んす}の移動をした。箆^た

さすがに、実莉の服が入った箆^{んす}は少し重かった。

しかし、俺が何十キロもある箆^{んす}を軽々と持ったことに実莉はびっくりしていた。

「うそ、、、一人で持てるなんて、、」と…。

それから少し後の話である。

俺は昼飯を食べ終え、手帳の解読に没頭していた。

箆笥（後書き）

金と力が欲しい。そうすれば支配者になれるのに…。

そこまでは思っていないませんが、確かに金と力は欲しいです。

死者（前書き）

自分のせいで人が死んだ経験があなたにはありますか？
主人公はあります。それを少しばかり悔やむような内容です。

死者

だが、手帳の解読は思ったより早く終わってしまった。

なぜなら、最後の日にちに^{たと}辿り着いてしまったからである。

その内容は以下の通りである。

「 7月15日 金曜日

今日は雨。

日にちがなかった。

もうこの生活には未練というものが存在しない。

だから、俺はこの間いるものはリュックにすべて詰めたので、それを持って外に出た。 目指すは駅。

あそこは人目に付きやすい。

だから奴らも下手なことはしてこないだろう。

7月18日 月曜日

今日は曇り。

監督に名前を呼ばれた。

正直、ばれたのではないかと思った。

しかし俺がしたことはばれてなどいなかった。

ただ、機械の整備で呼ばれただけだったから…。

7月21日 木曜日

今日は雨。

俺は最終の段取りを、CとLとXに聞いた。

「よし完璧だ」

この声と共に俺はスーツケースを持ち出した。

本当は、この時にリュックを持っていきたかったんだが、大きさの問題でこちらを選んだ。

7月24日 日曜日

今日は生憎あいにくの雨。

しかし、もう待てない。

次に来るチャンスが何時いつかなんて想像もしたくない。

だから、俺はみんなと走った。

奴らの追いかけてくる足音。

さすがにきつかった。

だが俺は逃げ延びた。

みんなは、、

CとLとXは死んでしまった。

半分冗談で始まった、俺達の逃亡劇。

逃げ延びたのは俺だけ…。

俺はみんなのためにも生きることが誓い、

例の薬を飲んだ。 記憶を消せるという薬を…。

「

ここで終わりだった。

わかったことは、俺が自みづから記憶を失ったこと…。

多くの死者を呼び、その中で生きた俺は薬を飲んだ。

俺が手帳を読んでわかったのはここまでだった。

死者（後書き）

記憶を失い、取り戻しつつあるが、
はたしてそれが本当にいいことなのだろうか？
記憶を取り戻すことがいいことだったのならいいのだが…。

ロッカー（前書き）

私は駅のロッカーを使ったことがないので、長い間放置できるかどうか分かりません。

だから“長い間”放置できることを前提に読んでください。
ではどうぞ！！

ロッカー

スーツケースに入っていた鍵は、多分駅の鍵。

だから、俺は手当たり次第に駅という駅を走り回った。

そもそも、俺は実莉に拾ってもらったときに乗り物には乗っていなかった。

だから、俺は標的を《歩きで行ける距離》に絞って探した。

“ガチャガチャ…”

鍵を挿した。

鍵を挿しまくった。

しかし、一向に開かない。

“アタリ”というやつが見つからない。

どうしたものか…。

俺は力尽きかけていた。

そんな時である。女神が俺に微笑んだのは…。

「鍵つて、ロッカーって、ホームのそこだけじゃなくて外にもあるよね？」

「それだ！！」俺は思わず叫んだ。

周りの人が一斉に振り向く。

しかし、そんなことはどうでもいい。

俺は急いで外に向かった。

“ガチャガチャ”

…開かない。

外にあったロッカーは全部で12個。

そのうちで、使つてあるロッカーは8つ。

俺は次々に鍵を挿しこんでいった。

「やっぱりここもダメか…」

あきらめを口に出した、5回目の挑戦。

俺はそこで奇跡というやつに出会う。

“ がちゃ ”

「開いた…」 実莉が小さな声で言う。

そして俺も…。

「開いた！」 「開いた！！」

とっても嬉しかった。頑張ったから…。

俺はその喜びを胸に中からリュックを取り出し、持ち帰った。

ロッカー（後書き）

あきらめかけていた時に、
うまくいくと嬉しいですね？
そんな1話でした。

メモ帳（前書き）

メモ帳……。手帳……。

私はこういったものを使いません。

なぜなら使うのがめんどいから（笑）

ただそれだけです。

ではどうぞ！

メモ帳

リュックの中身は、メモ帳と鍵2つとネックレス型のタグだった。
なぜこんなものが？

俺はタグの意味がわからなかった。

しかし、タグに書いてあった文字を見て驚いた。

「3 2 7 1 6 号 F」

3 2 7 1 6 号？

一体？

一体何を意味するんだ？

俺はFなのか？

それはあだ名なのか？それともイニシャルなのか？

俺にはさっぱりわからなかった。

しかしわかったことはあった。

それは、俺達の想像をはるかに超えた何かが関係している。

それだけだった。

だって、何か大きな存在が関わってなくては、Sや他のみんなが死んだことや、俺が記憶をなくしたの説明がつかない。

何かの実験か、それに準じるそれ相応なものがなくては説明がつかないのだ。

俺はそう考えた。

そう考えるしかなかったのである。

鍵の一つは車の鍵だった。

それがどこにある車の鍵なのかはわからない。

今度はメモ帳を辿れということなのだろうか？

たぶんそういうことなのだろう。

俺は嫌になっていた。記憶探しというやつが…。

同じことの繰り返し。

わからないことは増えるばかり…。

そんなのがいいと思う人間がいるだろうか？

もしいたとすれば、俺にはそんな人間は理解できない。

俺はそう思っていた。

しかし、辿ることをやめてしまえば記憶に辿り着くことは一生なくなるだろう。

偶然なんて言葉は信じていない。

だから、偶然何かの拍子で記憶が戻るとも思っていなかった。

俺はその理由から嫌になっではいたが、あきらめはしなかった。

『記憶を取り戻したい！』 その一心で…。

メモ帳（後書き）

「タグ…なんだか軍隊みたい…」
そう思ったあなた！正解です！（笑）

警告（前書き）

世の中には色々な警告があふれていると思う。
みなさん、それが善か悪かを確かめて生きてください。

警告

メモ帳…。

これには長々といろいろなことが書いてあった。

内容は以下の通りである。

「まず、車のキーは黒いバンのキーだ。
その車ナンバーは名古屋432 東15-44 である。
それを探せ！次の探し物はそこにある。」

次に、もう一つの鍵はスーツケースの鉄板をはがせ！
そこに小さな箱が埋め込んである。
それを取り出し開けるんだ。
鍵はそれを開けるための鍵だ！

後、追手はいないと思う。
だが、念のために言っておこう。
たぶん助けになった、もしくはなっている人がいるだろう。
そいつに気をつける。
何かあつてからでは遅いぞ…！
もう人が死ぬのは嫌なのでな…。

最後に、薬の効果が切れることはない。
だから待ち続けても無駄だ。

せ！

記憶が欲しいと思うなら、嫌な思い出が欲しいと思うなら探
探し続ける…。しかし、何も思ふな。あいつらにかかわるな。

「

言っていることが矛盾しているのでは？

俺はまず始めにそう思った。

しかし、それだけ危険な相手ということなのだろう。

メモ帳が暗示させるのは“警告”。

それだけ慎重にやれ！行動しろ！

つということなのだろう。

俺は、死人を見た記憶はない。

しかし、人が死ぬのは、

人が自分の目の前で死ぬのはごめんだ。

それが自分のせいというのならなおさらごめんだ。

だから、俺は実莉に迷惑をかけないようにしようと誓った。

警告（後書き）

人には迷惑をかけずに死にたいものですね。
少なくとも私はそう思います。

ナンバー（前書き）

私は車が好きです。

って言ってもあまり知りませんが（笑）

古いのだと、グロリア・セドリック。

最近のだと、クラウンアスリートかな。

外車はリンカーンとか？キャデラックとか？

まそんなもんです。ではどうぞ！！！！

ナンバー

俺がそんなことを考えている時である。

実莉が「ちよつと貸して」つとメモ帳を俺から借りて読み始めた。

するとしばらくして、実莉がふいに声を上げる。

「え？ちよつと待って！」

「これおかしいよ！」

俺はその言葉を聞き「どうした？」「何があつた？」と聞いた。

すると実莉は「このナンバーおかしいよ」

「私車のことは詳しく知らないけれど、ここの東つてところありえないよ」

「普通はここに平仮名がくるから……」

「だから、その、、漢字だなんておかしいよ！」

確かに、言われてみればそうだ。

ロッカーを探すときに目に入った車はすべて平仮名だった。

このメモ帳に書いてあることはおかしい。

俺達はそう考えた。

しばらくして、これが何かの暗号だということに気が付いた。

っというより、そう考えることにした。

たぶん、車のある場所を指し示すんだ…。

俺達はそう考えた。

しかし、どれだけ悩んだところで答えは出なかった。

気力、、、これが俺達の戦う相手だった。

「はあ…」 「わかんないや…」

実莉が弱音を吐いた。

まあ無理もないか…。

俺達は、わからないことをわからないがゆえ、考え続けていた。

そう、、、5時間も…。

「そろそろやめにしようよ…」

実莉が後に続ける。

「わかった」

俺は実莉を気遣い、考えることをやめにした。

そして、食事の時間。

実莉はあることを言った。

「そういえばすっかり忘れてたけど、スーツケース…」

「スーツケースの鉄板はがして、箱の中身を見なきゃ!」

確かに忘れていた。

ナンバーの謎を解くのに必死になっていたから…。

だから、俺は「飯を食い終わったら開けよう」と言った。

ナンバー（後書き）

主人公は忘れん坊です。実莉も…。そして私もです（笑）

ビックリ箱（前書き）

章で分けることにします。
そのうちできます（笑）

ビックリ箱

“バリッ”

部屋にスーツケースの鉄板を剥がす音が響き渡る。

そして、その音と共に小さな5×5センチぐらいの箱が出てきた。

「あっ！」　　つと実莉が小さな声をこぼす。

俺はその小さな箱を手を取った。

箱の形はよくある感じの形…。

俺は不安と共に恐る恐る開けてみた…。

すると「あっはっはっ　驚いたあゝ？」　「ビックリ箱だよーん」
　　と箱の中から声がした。

そして、箱の中から何とも微妙な感じで蛇が飛び出す…。

「・・・」

俺達二人は無言になった。

記憶をなくす前の俺は何を考えてるの？

俺はそう思った。

するとである。

そんな箱にも意味があった。

メッセージが隠れていたのである。

箱の底に紙があったのである。

その紙には以下のことが書いてあった。

「車のナンバー…

それがおかしいことには言わなくても気が付くと思う。

しかし、そのナンバーなどの暗号が

どこの駐車場に止めてあるかを示すものとは

さすがに気が付かないと思う。

だから、そのことを前提に考えて行け…。

」

わからない…。

なぜこんなに回りくどく言うのか？

はっきり言って、ヒントを与えていたら同じではないのか？

俺はそう思った。

しかし、そんなことを考えている時間があるのなら、俺達は謎を解く…。

そう思い、謎を考えることにした。

ビックリ箱（後書き）

ビックリ箱で表現は合っているのでしょうか？
謎は深まるばかりです。。。

暗号（前書き）

最近文字数が少ない気がする。
本当にすみません。でも手一杯です。

暗号

次の日である。

「車ナンバーは名古屋432 東15・44」

俺達ははメモ帳に書いてあることを思い出していた。

しかし、これといって何かわかることは何一つない。

だから、内容について、暗号について考えることにした。

しかし、1分待っても、1時間待っても一向に解ける気配はしない。

ただ無意味に時間だけが過ぎて行くのである。

果たしてどういうことなのだろうか？

東は、あるところから東に向かえということなのか？

わからない…。

だから俺達は、まず始めにそう考えることにした。

次に名古屋432である。

まあ、前のもわからなかったのだが、これがまたわからない。
想像も検討もつかない。

だが、そんな中で1つの案が出た。

「住所かな？4丁目3-2とか…？」

実莉が自信なさげに言う。

しかし「それしかない！！」

俺はそう言った。

なぜかというと、それ以外に思い浮かぶものがなかったから…。

ただそれだけであつた。

次に『15-44は何だろうか？』と考えていた。

名古屋、4丁目3-2、東、、、

そう来たらやはり地名関係だろう。

俺達はそう仮定した。

しかしである。

考えてもわからない。

たとえば、、

以後獅子？囲碁シシ？良^い子良^よし？

とりあえずゴロではなさそうだ…。

速攻でそう思い、速攻であきらめたりした。

『じゃあ…？』

しかし、他をいくら考えても何も思い浮かばない…。

どうしたものか？俺達は完全に困り果てていた。

そんな時である。

「あ！」

「わかった！！」

つと実莉が叫んだ。

暗号（後書き）

暗号を考えるのには時間がかかりませんでした。
だからその分簡単になっていると思います（笑）

解読（前書き）

暗号を解読できましたか？

まあ考えていませんよね…誰も…（笑）

解説

実莉が言う。

「あ！」

「わかった」

「わかったよ」つと。

そして次に「おーてだよ！^{おおて}大手！！」つと実莉が叫ぶ。

それを聞いた俺は「どういうことだ？」つとすぐに聞き返した。

実莉は言う。

「まず始めに『15・44』を15と44にして考える。

次に15は携帯でメールを打つように、1の部分を5回打つ…。

すなわち、1を5回打つことで、『あいうえお』となり、

15は『お』を指し示すことになる。

次に44だが、4の部分を4回打つ…。

すなわち、4を4回打つことで、『たちつて』となり、

44は『て』を指し示すことになる。

この『お』と『て』を『15・44』に当てはめると、

『おーて』となり、『おおて』となる。

これは名古屋にある『大手』という場所を示すのではない
か？
「

そう実莉は口にした。

『かつ！かしこい！！』 俺はそう思った。

相棒が実莉で本当によかった。

俺一人では何も解けないのではないか？

一生謎に近づけないのではないか？

そう思ったからである。

解説（後書き）

名古屋に住んでますが、東大手駅がどこにあるかわかりません（笑）

ビンゴ（前書き）

ビンゴゲームのビンゴではありません。
ピンッ！！と来た時のビンゴです。

ビンゴ

俺は文明の利器、コンピュータなるもので「名古屋 大手」と検索することにした。

しかしである。

いくら検索しても、郵便局などは出てくるが“ピン”と来るものが全然来ない。

俺達は次に、「名古屋 大手 東」と検索した。

するとである。

コンピュータとは、インターネットとはどんなに素晴らしいことか！

答えが出てきたのである。

俺達の探していたものは、名古屋にある東大手駅。

なんとその住所は「名古屋市東区三の丸4丁目3-2」ときた！

ビンゴにもほどがある。

そう思ったが、とりあえず行ってみることにした。

何事も実行してみるのが一番なのである。

しばらくして、東大手駅に着いた。

だから俺達は、黒いバンを探した。

しかし、見つからない。

地下鉄付近の駐車場はもちろん、コンビニもスーパーの駐車場も見た。

しかし、見つからない。

鍵に反応する車が見つからない。

キーは俺がopenを押すたびに何度も無意味に点灯する。

しかし、どれだけ押したところで見つからない。

どこなんだろうか？

俺達の頭^{なか}に「あきらめる」の5文字が浮かんた。

しかし、しかし、しかしである。

ヒントはここに黒いバンがあると語っている。

だったらここにあるのではないか？

だから、俺達はもう一度駐車場を探し回ることにした。

ピンゴ（後書き）

私のイメージとしては日本車ではないですね（笑）
私はベ○ツみたいないな外車を想像してます。

銃声（前書き）

連載処女作の『終わりき恋』の話数を超えることができました。
しかしながら作者は疲れました。少しあげるスピードを遅くします。
本当に申し訳ないです。

銃声

駐車場をもう一度よく探したが、黒いバンで、俺の持っているキーに反応する車^{もの}なんてなかった。

そんな時である…。

「次で最後にしよう？」

「もう夜になってきたし、あまりに真剣で昼も食べてなかったから…」

そう言つて、実莉が俺に愚痴をこぼした。

「ああそうだな…」 俺はそう返事をして、心の中で謝った。

それから10分後である。

俺はやけになって、適当にキーのopen部分を連打していた。

もうすでに、最初に探し始めてから2時間と58分が経とうとしていた。

その時、後ろで車のライトが光った。

そう！俺の後ろの車の鍵が開いたのである。

『連打していてよかった！！』

俺はまず始めにそう思った。

それはなぜなら、鍵が開いた車は民家の駐車場に止めてあった車だからだ。

俺達は、過去の俺がてつきりどこかの駐車場を借りて、そこに止めているものだと思っていた。

だからこんなに時間がかかったのである。

しかし、そんな考えは喜びで吹っ飛んでいった。

俺は実莉と手を挙げて喜んだ。

「やった！！開いた！！！」っと…。

それから「また一步記憶に近づいたね」っと実莉が言う。

だが、そんなことはもう夢でしかない。

この実莉が言う「また一步記憶に近づいたね」の2秒後に俺の耳に銃声が聞こえるのだから…。

銃声（後書き）

何とも言えないところで終わりましたね（^^
けれども次はいつになるか分かりません。
それでは（^o^）ノ

意識朦朧（前書き）

私も意識が朦朧とします。
もうダメかもしれません…。
そう、、、暑さでね（笑）

意識朦朧

『うつゝ……』

『……………』

『……………』

『ここはどこだ？』

俺は意識が朦朧きうきうとする中、そう思った。

しかしわからない。

思考もまともに繋がっていないあげく、目を開けることができない。

俺はしばらく固まっていた。

だが、固まっただけばかりもいられない。

だから次に『なぜこのような状況になったのか？』について考えることにした。

しかしわからない。

まったく言っていないほどに…。

しばらくして、、

時間になると、数時間…。

数時間経って耳が聞こえるようになってきた。

最初は誰も話していない、無音の場所で寝かされているものだと
思っていた…。

けれども時間が経つにつれ、それは間違いだということに気付く。

なぜなら、少し離れたところで誰かの話声が聞こえるから。

しかし、何を話しているかまではまったくわからなかった。

意識朦朧（後書き）

にしても、夏ですね^^
本当に暑いです（^^）

名前（前書き）

久々の更新です。

すみません みなさん（- - ;）

名前

しばらくして、意識という意識が俺の下に戻ってきた。

そして、声が俺の耳に届くようになった。

「あいつのことだが、あきらめた方がいい」

「もう望みは薄いぞ……」

40代ぐらいの渋いオッサンの声……。

あいつとは誰なのだろうか？

わからない

俺のことなのだろうか？

だとすると、何が望み薄なのだろうか？

俺はここで意識を覚ました。

ん？

俺はなぜ意識を失っていたのだ？

わからない

そう思った。

しかし、現実とは違った。

『俺は撃たれたんだ…』

そのことをわかってしまったのだ。

思い出してしまったのだ…。

なぜ俺は撃たれる破目に？

なぜ俺はこんなことに？？

それを考えれば考えるほど、世界は理不尽だと思つうようになった。

しかし、まだ俺は本調子じゃなかったのだらう…。

気が付いたら、また寝ていた。

俺が目覚めると、ベッドの横には実莉がいた。

そして目を覚ました途端、実莉は叫んだ。

「やった！！」「西郷さん（さいこうさん）“カズキ”が目覚めたよ！！」

と

カズキというのは俺に実莉が付けてくれた名前だ。

もう半分忘れていた。

記憶も曖昧な俺の人生では、そんなことは極々当たり前のことだった。

名前（後書き）

みなさんは自分の名前が好きですか？

クローン紛いな存在（前書き）

クローンについて詳しいことは知りません（笑）

クローン紛いな存在

『西郷さん？ 一体誰だろうか？』

俺の中でそんな思いが巡る。

しかし頭の中で名前を探すが、西郷という名前には心当たりが全くなかった。

『・・・誰？』

『だれ???』

『誰なんだ？』

俺の頭の中ではそんな思^{こと}いでいっぱいになった。

しばらくして、俺が話をできるようになった頃、

俺は実莉に「西郷とは誰か？」と聞いた。

しかし答えは実に簡単で、俺が撃たれたときにたまたま近くにいて助けてくれた人だった。

だが、ここからが簡単なことではなかった。

実は西郷さんは…

西郷昭英さいこうあきひでという人間は、俺の居た…

記憶を失う前の俺が居た場所の管理をしていた人間の1人だったのだ。

俺が居た場所は、政府の一般には公表されていない秘密機関であり、政府はそこでいわゆるクローン紛いの人ものを作っていた。

よって、俺はクローンの的な存在であり、政府に秘密裏に作られていた人間だったのである。

ここで一つ…。

俺がクローンというのではなく、クローン紛いなものというのに理由がある。

なぜなら、クローンとはベースになった人間がいる。

けれども、俺達 作られた人間にはベースになった人間がいな
い。

そう、俺達はクローンではないのだ。

俺達は紛いな生命にんげん体なのだ。

クローン紛いな存在（後書き）

「サガシモノ」の更新も久々ですが、
「愛の言霊」の方がご無沙汰です…。

まだまだ先になると思うので、本当に申し訳ないです。

人生（前書き）

人生とは不思議なものです。

人生

どうすればいいのだろうか…？

自分が実際の人間ではなく、作られた人間だと知った今、どういう顔でどうやって生きればいいのか？

俺にはまったく想像がつかなかった…。

いやっ、想像できなかったという方が正しいのか？

そんなことを考えても何の慰めにもならなかった。

俺が作られたクローン紛いな生命体だということは間違えないみたいだし、何よりも今までの俺達（俺と実莉）がしてきたことが物語っていたから事実としか言えなかった。

俺は絶望した。

人生というやつに…。

いやっ、自分になのか？

それすらもわからないまま、俺は1日を終わらせた。

俺が西郷という者の家で目を覚ました次の日…。

俺は俺について詳しく話を聞くことにした。

まず始めに、西郷家は西郷善治さいこうぜんじとその妻の清己きよみ、その子供の朱巳あけみの3人家族であった。

しかし、遡ること15年前…。

時は善治と清己が結婚して3年目…。

善治は清己が子供を産めない体だということがわかったので、孤児院に行つて1人の女の子を引き取ることにした。

・・・それが朱巳である。

朱巳は実に明朗闊達めいろうかつたつな子であり、成績も優秀であった。

朱美は現在23才であり、父と同じで公務員をやっている。

っと言っても善治の方は前から3年前に喧嘩が原因で退社している
ので、もう同じではないのだが…。

人生（後書き）

祭りに行ってきます。

H E S E (前書き)

政府機関の話です^^

H E S E

昔の俺が居た政府機関は通称H E S Eと呼ばれ、正式名だとH u m a n - R e l a t e - S o c i a l - C e n t e r 呼ばれている。

これは少子化対策として作られた機関であり、まだ実験段階ということと、クローン技術は神の意に反するということで正式に公表されていなかった。

俺はそんなH E S E が許せなかった。

自分達を勝手に創り出し、それでいて死を何とも思わないことが気に入らなかったのだ。

だから、俺はH E S E に反抗することにした。

そう、自らの手を使ってである…。

暴力は破壊しか生み出さない。

しかし、そんな暴力を使う俺を生み出したのはH E S E である。

だから潰されても文句は言えないだろう？

俺はそう考えた。

しかし、それと同時に『創った物に壊されるとは、はたしてどんな気持ちなのだろうか…？』とも思った。

だが、俺は創られた側であり、一生をかけてもそんな気持ちを理解することはできないだろう。

俺はそう思った。

しかし『1人ではどうにもできない』と思ったので、俺は西郷さんに協力を求めた。

「あんたの娘に危害は加わらないようにする」

「だから、少しでもいいんだ…」

「H E S Eを潰すのを手伝ってくれないか？」　　と…。

しかし、西郷さんはすぐに「YES」とは言わなかった。

それは娘のことを思っているからであり、俺を完全に信用していないからであった。

何とも不甲斐ない…。

自分が情けなくてたまらないと思った。

そんなことを察してか、西郷さんは「わかった」と言ってくれた。

ある条件と共に…。

H E S E (後書き)

少し小説書く気が起きません(笑)

条件

ある条件とは、人を1人も殺さないこと…。

それは組織（機関）だけを潰すということ…。

しかし、俺も元々そのつもりだった。

なぜなら、『俺にも、そして神すらも人を殺す権利なんてない』と俺は考えるからだ。

だから俺は2つ返事で条件を飲んだ。

しかし、組織を潰すにも人手が足りない。

それは明白な事実だった。

だから俺は、西郷さんに「昔の仲間をあた^{とも}ってくれないか？」と頼み込んだ。

すると、西郷さんは次のように答えた。

「できる限りのことはする」

「しかし、仲間が集まる保証はないぞ？」

そう言うので、俺は「それでも構わない」と西郷さんに告げた。

そう、、

俺には西郷さんを頼るしかないのだ。

俺は作られた人間なので、身寄りがない。

よって頼る人間もない。

だから西郷さんの仲間に、H E S E 壊滅の手伝いを頼むしかなかった。

条件（後書き）

文字数が少ないですね（笑）

コード名(前書き)

暑いのか、寒いのか、、
そんな天気が続いてますね。

とにかく、体に気を付けてください^^

コード名

3日待っていたら、西郷さんが仲間を呼んでくれた。

その仲間は、主に2部隊に分かれていて、攻撃部隊と情報戦略部隊の計7人の部隊であった。

しかし、どちらも「本名は捨てた」とのことでコード名しか教えてくれなかった。

まず、攻撃部隊が4人。

コード名が“サック”という名の万能部隊長。

コード名が“アギト”という名の銃撃専門の人。

コード名が“シグ”という名の武術専門の人。

コード名が“アキ”という名の隠密行動専門の人。

この中で、“アキ”だけは女である。

やはり、女とはすばしこい生き物なのだろうか？

俺は、ふとそんなことを思った。

次に、情報部隊の3人である。

コード名が“サイ”という名の主に指示担当の人。

コード名が“キキ”という名の敵監視役の人。

コード名が“イッサ”という名の情報潜入の人。

この中で“キキ”だけが女である。

俺からしてみれば、性別なんて関係なかった。

仕事をしてくれるなら…。

ちゃんとH E S E壊滅の手伝いをしてくれるなら…。

コード名（後書き）

愛の言霊が、全然人気がない…。

そんな俺の過去の作品を読んでない方は、どうぞ!!

<http://ncode.syosetu.com/n2362t/>

短編小説「私の恋と私のサヨナラ…」

自己紹介

それからしばらく、自己紹介タイム的なものがあった。

っと言つても、10分程度の時間だが…。

とりあえず、その時間でわかったことが2つあった。

とにかくみんなH E S E が嫌いだということ。

そしてH E S E と口論になり退職したこと。

その2点であつた。

H E S E が嫌いな理由。

それは、H E S E が非道的であるからだろう。

H E S E は過酷な肉体労働を強いらせ、「人間ではないから死んだらまた作り直せばいい」という考えで、いくつもの酷い事をしてきたらしい。

その中の1人がこの俺…。

俺はそんな毎日が嫌になり、H E S E から逃げたのだろう。

いや、、、

俺以外にも逃げようとした人は沢山いた。

俺に協力をし、そして死んでしまった人。

そんな人が何人もいた。

俺はその人達に生かされているんだ。

俺はそう思った。

とにかく、みんなそんなH E S Eが嫌いということが集まってくれた。

そんな俺達は、さっそく自己紹介の後に作戦会議を進めた。

自己紹介（後書き）

短いね…。

リーダー

まず、今回のH E S E壊滅作戦は攻撃部隊が潜入し、情報部隊はハッキングをして情報を消す。

それが今回の作戦である。

刃向う者も、殺さずに助ける。

これが鉄則であり、その大義の下で、俺達はH E S Eを壊滅させる。

俺達は、作戦を立てるために話し合った。

少しして、情報部隊が、『気に入らない』という顔を始める。

しかし、俺はその姿をただ気にせずに話を進めた。

すると、ついにキキが机を“バン”と叩き、立ち上がって言う。

「ねえ!？」

「あんた達、私達を馬鹿にしてるわけ？」

「どうせ攻撃ができないからだとか、どうせお前らは弱いからみ

たいたいい方して…」

「情報部隊がいらないなら、帰るけど??」

そういったキキの態度に口を出したのは、以外にもサイだった。

「少し、落ち着け!!」

「俺も、お前が言いたい事はよくわかる」

「確かに、俺もこいつらの言い方は気に入らない」

「しかし、ケンカしてどうなる?」

確かにそうだ。

俺が止めればよかった。

ここでのリーダーは、任務を頼んだ俺。

俺が止めていればこんな揉め事は怒らなかったのだろうか?

俺は少し、攻撃部隊を注意することにした。

リーダー（後書き）

暑いですね。

会議終了

「喧嘩はしないでくれ…」

「俺は喧嘩するためにここに皆を集めたわけじゃない」

「だから、喧嘩だけはやめてくれ」

俺はそう、みんなに向かって言った。

今回の会議の目的は仲間同士の喧嘩じゃない。

ただ、それだけのこと…。

俺が話した後、どちらの部隊も落ち着いてくれた。

これで、真面目に作戦が計画^{たて}れる…。

俺はそう思い、会議の本論にもう一度戻した。

「今回は、、、」

「つと言っても、今回が初めてだが」

「攻撃部隊が向こうの情報端末を制圧した後、情報部隊に動いてもらう」

「しかし、突入も簡単には行かないと思う」

「だから、情報部隊が衛星にハッキングして、熱とか紫外線で感知しろ！」

「そして、それを攻撃部隊に無線で連絡し、情報端末を制圧する」

「次に、情報部隊は向こうの情報がある程度得たら、データを全て消す」

「攻撃部隊は、得た情報により動き、火薬を設置しろ！」

「最後に、攻撃部隊は時間を見計らって、ドーンっと一発お見舞いでよろしく」

「作戦は以上だ」

「わからない事や、納得のいかないことがあるのなら、別途俺に言ってくれ！」

「そして、お互い気に入らないことがあつたら、もめる前に俺に言ってくれ」

「それでは解散!!」

こんな感じで作戦会議は終わった。

しかし、これは俺にとって納得のいく会議ではなかった。

もめるので始まり、わだかまりを残しながら、会議終了…。

そんなのに、どこのリーダーが納得できるのだろうか？

少なくとも、俺には納得ができなかった。

会議終了（後書き）

とりあえず、第二章完結です。

次回の連載は少し間が空きます。

その点をご理解ください。

突入開始（前書き）

更新が遅れてます。
すみません。

突入開始

「用意はできたか!!」

その万能部隊長のサツクの声で、みんなは突入した。

政府機関に突入ということで、用意は随分してきた。

だが、リーダーであつた俺が、

政府機関・・・H E S Eを潰したいと思っている俺が、H E S Eの場所を覚えていない。

これは俺が記憶喪失だから仕方ない事だったが、「場所がわかりません」では作戦実行以前の問題である。

だから、俺は西郷さんに「H E S Eの場所を教えてください」と頼んだ。

それから約3日間が経ち、突入時に使う銃の弾丸の調達や、コンピュータの調整を行い、いざ作戦実行となった。

「アギト、Lクリア!!」

「シグ、Rクリア!!」

そうやって、中に入った後、左右を確認し、イッサがポジションに着いた。

さすがに、政府が秘密裏に動いているだけあって、施設が地下あり、厳重な管理がされていた。

しかし、事は不幸中の幸い。

なぜなら、地上には警備部隊がいなかったのだ。

だから、厳重な警備・・・指紋認証はもちろん、骨格認証、心拍認証、声帯認証、暗証番号認証、そして鍵を使い開閉して、やっと地下に入れる…。

それだけのことを、イッサはあまり周りを警戒せずに、1分30秒ほどでやり終えた。

シュート

そして俺達は、全員中に入り、地下に向かう。

そして、扉が開いた瞬間、サックはシュートと言う。

このシュートというのは、見えないところから、どこか違うところに出る時に使う言葉である。

俺はそういった言葉を全然知らないので、何となく見てそう思った。

だがここで、なぜそういった言葉を覚えなかったかと言うと、H E S Eを潰すと決めた日まで、時間がなかったから。

これもあったが、一番の理由は、攻撃関係、制圧関係は、「俺が指示する」とサックが言ったからである、

はつきり言って、下手に言葉を覚えられては、「邪魔になる」とも言われた。

しかし、それはそうである。

俺がサックだった場合、そうでなくても、その意味が十分に理解できる。

そう思ったから、俺は大きな命令以外はサックに任せることにした。

そんな感じで事は進み、攻撃部隊は地下1階に突入していった。

お偉いさん

地下1階の突入後、サックたちは1階で仕事をしていた13名のH E S Eのメンバーを拘束した。

それにかかった時間は、なんと5分。

しかも、13人の全員に手錠をかけてこの時間だ。

よもや「すごい！」としか言いようがない。

本当にそう思った。

だが、そんな感心ばかりもしていられなかった。

それは、13人の内、なんだか“お偉いさん”が“侵入者を知らせるためのボタン”を押したからである。

「くっそが!!」

「余計なことをしゃがって!!」

そう、シグが言い放ち、“お偉いさん”に一発パンチをお見舞いした。

だが、殴ったところで何も問題は解決しない。

どうせするなら、より早く下に潜り、H E S Eを壊滅するという
ことだけ…。

だから、俺は次に命令を出した。

「シグはここで待機！」

「それ以外は、俺と一緒に、さらに下に向かうぞ！」と

仲間の死

それから、地下4階までうまく制圧していった。

しかし、研究室。

5階の研究室にて、問題が1つ発覚する。

それは、H E S E が政府にとっての重要機関なため、内部にも政府の部隊が数名いたということである。

だから、俺等は戦わなくてはいけなくなった。

だが、いくら敵である政府の人間でも“助ける”がモットーな俺達チーム。

それが問題で、アキが犠牲になってしまう結果ことになってしまった。

「畜生！……！！！」

「アキ……」

「目を開けてくれ……！！」

「目を開けるんだ……！！！！」

そう、イツサが叫ぶ。

しかし、敵が放った弾丸は頭に直撃…。

よもや、痛みすらなかっただろう…。

アキと付き合っていたイツサ。

共に、政府へのミッションをクリアすると誓ったのだろう。

しかし、俺がそのミッションに人を誘ったせいで、アキは死んでしまうことになった。

『恨まれても仕方がないだろう…』

俺はそう思い、イツサに向かって、言葉を放った。

責めてくれれば

「ごめんイッサ…」

「俺が、この計画を

」

「やめてくれ！」

「あんたは悪くないんだ…」

「だから、詫びるような真似だけはよしてくれ」

「そんなことを思う暇があったら、これから任務について考えてくれ」

イッサは、俺にそう告げた。

/ / / / / / / / / / / / / / / /
/ / / / / / / / / / / / / / / /

/ / / / / / /

いつその事、俺を責めてくれれば、何も考えないですんだのに…。

なんでイツサは、俺を責めないのだろうか？

俺がすべて悪いのに…。

なんでなんだよ…。ちくしょう…。

ダイナマイト設置

気持ちの葛藤をした挙句、俺はイッサに甘えることにした。

なぜなら、後でいくらでも悩むことはできるんだ。

けれど、今しか任務は全うできない。

ここで失敗してしまえば、俺のしたいことができないだけじゃない。

アキ以外にも犠牲が出てしまうかもしれないし、それにアキの死が無駄になってしまうんだ。

だから、俺は前に進むことにした。

苦しくたって、イッサの気持ちより、アキの想いよりマシなんだから…。

「今から、最下層の6階と7階に突入するぞ!!」

「予定通り、ダイナマイトを設置して、人を逃がせ！」

「1階あそこにいる人間もだ！！！」

「だから、6階と7階の制圧が終わったら、全員俺とシグに連絡を入れる！！！」

「では、また無線で！！！」

そうして、俺達は二手ふたてに分かれることになった。

最高責任者

「こちらは終了クリアした!」

「6階の方は無事にクリアしたか?」

地下7階担当の俺が、地下6階担当のシグに連絡を入れると、シグは答えた。

「ああ!」

「こつちも今、設置が終わったところだ」

「今から、全ての人間に脱出命令を出して、任務を終わらせる」

「では、また地上で!」

そうやって、俺はシグの言ったように、無事に地上で落ち合つて、とを願い、任務の方に目を向ける。

「この最高責任者は誰だ!?」

「今から、10数える間に出てこないと端から順番に打ち殺す！」

「^{イチ}壱！！」

「^ニ弐！！」

「^{サン}参！！」

“バン！！！！”

俺は威嚇のために天井に向かって、1発^{はな}打つ。

「くっそう……」

オッサンというのか、ジイさんというのか、とにかくそういった
“お偉いさん”が奥から呟きながら出てきた。

そう、、威嚇の効果があったということだ。

自分の気持ち

俺はジイさん、、

すなわち、H E S E の最高責任者に、《俺達のことを口外しないこと》と、《もう二度と、人を作って研究するような施設なんて作らないこと》を半分無理やり承諾させた。

もう、俺みたいな被害者はいないから…。

もう、俺みたいな作り物なんて存在しなくていいから…。

そう思った思いでいっぱいだった。

ここに来るためにも、色々な犠牲者を出してしまった。

俺の脱獄の手伝いをしてくれた、C や L …。

そして、アキという大切な仲間…。

こんな俺でも、支えてくれる仲間がいる。

それは、出会ってすぐの仲間かもしれない。

けれど、俺の少ない記憶の中では、十分すぎる存在だった。

だから、皆で、、

《今生きている全員で脱出したい…》

それが俺の願いだった。

自分の気持ち（後書き）

これで、第三章は完結です。

また、この話は一段と短くなっていますが、申し訳ないです。

HESEの壊滅（前書き）

第四章の幕開けです。

ズサァー————!!!!!!

俺の中には、建物が壊れる音が響く。

それは、自分達が設置したダイナマイトの爆発の所為で起きたものだった。

そして、爆発音 建物崩壊音 悲鳴と連なって、音は流れて行った。

いくつもの「うわぁー」とか、「逃げろ!!!!」とかの悲鳴が俺の耳を劈く。

だが、それはH E S Eの壊滅を示す象徴だった。

しかし、それを喜んでばかりもいられない。

自分達が起こしたことだから悲鳴を上げていないにしろ、悲鳴を上げたいくらいな状況ということは変わらない。

だから、俺は自分のことを考えていた。

『ちくしょう！！出口までは約20mだが、もう崩壊した壁はそこまで迫ってきている…』

『俺達も、もはや逃げられないか？』

『くっそ……こんなところで……』

そんな想いが俺の中に渦巻き始める。

しかし、本気で走ったからか、助かることができた。

そう、、、俺と数名の人間は…。

生と死を考えて

《なぜ、自分が助かったのか？》

《なぜ、仲間は助からなかったのか？》

俺達は、そんな考えに苛さいまれた。

いくら考えたところで、答えのない迷路。

俺達“生き残った側”の人間は、そんな辛さに悩まされた。

しかし、それは《生かされた》という証そのもの。

『自分は死んではない、生きている』ということを実感できるものだった。

だから、俺達は割り切るということを選ぶほかなかった。

それは、辛い選択だったし、やってはいけないことだったのかも
しれない。

しかし、俺達はそれでも尚、考えることが多かった。

《他に道はあったのではないか？》

《もしかしたら、あの時に、、、》

そうやって、これからを背負っていくしかないんだ。

そう、、俺達は現実を思い知ったのだ。

しかし、そんな深刻な状況下、俺を支えてくれる人もいた。

それは、一緒に生死を共にした仲間であり、俺の運命を最後まで見守ってくれた友達であった。

「ありがとう、本当にありがとう」

俺はその言葉を皆に告げ、チームを解散とした。

チームの解散後、俺の中に残るのは、“寂しさ”と“実莉”だけだった。

仲間の死亡宣告

爆発で死んだ仲間には、本当に感謝もしているし、「すまない」とも思っている。

だから、、

だからこそ、特殊部隊の死亡宣告をやらせてくれと、H E S E を壊滅させたすぐ後に、イツサに俺は志願した。

それは、親やその他の家族に、「あなたの子供は死にました」と言いに行くもの。

それは、誰だつて言いに行くのは嫌なわけだし、「行きたい」と自ら言う人はいない。

だが、世話をしていた、

政府を抜けた特殊部隊を世話していたイツサは、そういったことを言えるわけではない。

イツサが、その正式なリーダーというわけではないが、そんなことを言ってしまうとチームの規律は乱れてしまい、どうにもできなくなってしまう。

だから、関係者ではないことを少し思われはしたものの、サックは俺が行くことを認めてくれた。

と言ってみたものの、本来政府で認められている暗殺、

表には出てこないが、そういったものは法律に触れることはない。

それは、法が許しているから。

しかし、今回の俺達のように、元暗殺部隊の連中が死んだところで、政府にとっては関係ない。

それは、“元”であるのと同時に、“所属していた”という事実
すらないのだから、政府にとってはどうでも良い事なのだ。

さらに言わせてもらえば、今回俺達がしたことは、政府が喜ぶ
ことではなく、まったくもってその逆だから、その死が公になるこ
とはまずい。

その理由は、言わなくてもわかるだろう？

簡単に言つならば、地の果てまで追いかけられるからだ。

とにかく、そういったことを防ぐため、俺達は最低限のこととし
て、死の偽装を行わなければいけない。

俺は、死の偽装の理由付けをイッサ達にしてもらった後に、死ん
でしまった仲間の家族に謝りに行った、

それはもちろん、誠意を込めて、
である。

ニュース

俺は、そうしたことをした後に、家に実莉と一緒に食事を取った。

この時の、時刻は7時半。

いつもの変わらない、、

というのはおかしいが、H E S Eのことを知る以前の生活に戻ることができた。

しかし、お別れが近いというか、そういったことで、少し食事中の空気は重たかった。

だが、そんな時、テレビを見ていた俺達の目に、何か見覚えのある建物が飛び込んできた。

それは、H E S Eの本部であつた建物だった。

「あつ・・・」

そうやって、息を漏らすように、実莉は言った。

数日前の話が、今では数年前の、ずっと経ってしまった過去のように見える。

「ああ・・・」

そうやって、俺も呟いた。

それは、お互い思ったことが同じだったから。

実莉の言いたいことも俺と同じだったから。

だが、政府にとっても痛手であった今回の件は、俺達の知っているようにニューズで伝えられなかった。

“民間企業の重大事故発生により、ビルが全て炎上！！”

“残るのは建物の残骸と、人々の亡骸だけ！！”

しかし、それでいいと思った。

死んでいった仲間も含め、俺達のしたいことはできたのだから。

任務は達成できたのだから…。

だけど俺は

ありのまま

だけど俺は

だけど俺は、この時が終わってしまうのが怖かった。

それは、実莉との別れがきてしまうから。

それは2人ともがわかっていることだ。

しかし、そのどちらが口を開けずにいる。

俺は、実莉と一緒にいたい。

実莉は優しいし、こんな俺の助けになってくれた。

だから、一緒にいたい。

けれど、そんな俺の傍にいても、実莉は嫌な思いをするだけ。

過去も持っていないし、お金もない。

生きる為に必要なものは、何も持っていないと思った。

すごく惨めだと思った。

だから、俺は実莉に向かって口を開いた。

「今までありがとう」

「これからは、ぶらぶらしながら、適当に生きていくよ」

「本当に、今までありがとう」

その言葉を聞いて、実莉は言った。

「うん・・・」

「でもさ、、私考えたんだ・・・」

「カズキは1人でしょ？」

「私もこの家では1人だから、話し相手が欲しいの」

『ん？どういうことだ？』 俺は咄嗟にそう思い、そう告げる。

すると、実莉は大きな声で、顔を真っ赤にしながら言った。

「私はカズキが好きなの！！！！！！」

「カズキは、私のことをどう思っているかわからないし、こんな可愛くもない女の子に言われても嬉しくないかもしれないけど、カズキとは一生で体験するはずもなかった体験ができたし、きつとこ

れからはそれに勝ることは起きないと思う」

「だから、その可能性を大きくするためにも、カズキと一緒にいたい！！」

俺はその言葉が嬉しかった。

それは、俺も実莉が好きだと思っていたから。

けれど、俺はこんな男だ。

今の実莉はそう思っているかもしれないが、いつかは変わってしまいかもしれない。

だから、俺はありのままを告げることにした。

ありのまま（後書き）

まさか？の実莉の告白です（笑）

感謝を込めて

「実莉・・・ありがとな・・・」

「でも、俺は」

ここで、俺は言葉に問^{つか}えた。

急に、実莉が俺に抱きつき、ある言葉を言ったから…。

「私のことを想っているのなら、何も言わないで・・・」

「私はカズキに記憶を取り戻して欲しいけれど、」

「でも！！でも、それが絶対じゃないし、カズキがいてくれれば・
・」

「私はカズキと一緒にいたいただけだから・・・」

「でも、こんな私じゃダメかな？」

「そう思うのなら、」

「私のことが嫌いなら、突き放してくれていいから・・・」

『俺はなんて幸せなんだ・・・』

心で、その言葉が反響する。

「ありがとう」

「やっぱり、俺は実莉が大好きだ！」

「今は、実莉は大学生だからダメだけど、卒業したら、結婚しよう！・・・！」

「カズキという実莉が付けてくれた名前しかないし、何の取り柄もない俺で、できるかはわからないけど、頑張ればどうにかなると思うから・・・」

「だから、これからを2人で頑張ろう！！！！！！」

俺はそう言った…。

言葉では言い切れないほどの「ありがとう」を込めて、ギュッと強く抱きしめながら。

感謝を込めて（後書き）

あっさりしていますが、これで第四部完結です。

ありがとうございました。

仲間の引退（前書き）

半月ぶりの更新ですね。

話自体は前作で終わっておりますが、これは“それから”をテーマにしたものです。

では、どうぞ！！！

仲間の引退

「お疲れ!!」

俺は元気よくそう告げる。

相手はH E S Eを壊滅させるときに、色々世話になったイツサ。

ここは、あるパーティー会場を貸切にした場所。

そう、

今回の話は、イツサの引退祝いである。

あれは、約10年前。

H E S E壊滅を手伝い、事件を起こしたと、裏の世界で有名になり、イツサの下には色々多くの仕事が入って来ていた。

そんな時にあった、俺達の結婚式。

ちなみに、ここで言う俺達というのは、もちろん俺自身と実莉である。

さて、そんなことは置いておいて、

とにかく忙しくて、イツサは結婚式には来てくれなかった。

だから、それをイツサは謝るために、俺達のところに話しかけに
来た。

わざわざ、あの時にしか接点がないというのに、俺達を呼んでく
れたイツサ。

俺は、「呼んでくれてありがとう、そして、謝らなくていい
さ」「ただ、俺達の子供の顔ぐらい拝んでやってくれ!」と言う。

「お前ら!!そんなところまで行っていたのか!!!!」

そう、大きな声で突っ込むイツサ。

「おいおい、あれからもう10年だぞ?」

「結婚してたら、子供ぐらいできるだろ?」

俺がそうやって突っ込みに答えてから、実莉が子供を紹介した。

「こっちが6歳になった莢花^{さやか}で、こっちが3歳の快斗^{かいと}です」

「ほら!ちゃんと挨拶しなさい!!--!--!」

子供たちは実莉に背中を押され、渋々と挨拶をする。

「さやかです！　かいとです！　こんにちは」

「おう！　！　！　」　「元気そうで何よりだ！　！　！　！　！　！　」

そう、イッサが大きな声を出すので、子供たちは実莉の後ろに隠れようとする。

俺達は、この何気ない日常を笑った。

俺達は、この“普通”という世界が大好きだ。

何もなければ、老いて死に、

そして、さらには芽吹いて生きゆく。

俺は、これが本来の人間の生き方だと思う。

今も、昔の失った記憶は取り戻せていない。

けれど、それでも元氣しあわせにやっている。

だから、そんな何気なさを大切に、今を家族と共に生きていこうと思う。

仲間の引退（後書き）

これで、「サガシモノ」は本当に完結です。

いろいろと更新が遅かったり、文字数が少なかったりして、不出来なところが満載でしたが、ここまで読んでくださって本当に感謝しております。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3280t/>

[サガシモノ]

2011年11月16日12時20分発行